村研大会番外参加記

大子町　小澤囿彦

第三十一回村研大会が茨城県北の大子町で開催され、盛会に終了できましたことは、喜びにたえません。今次大会のテーマは「農政と村落」でありましたが、過疎山間の大子町で生活している私にとっては、大いに関心のある課題でした。「今の農村は、農政によって果して明るい展望をもつことができるのでしょうか。」こうした課題のものに、懇親会の席にて自由に話し合いを持つことができ、農山村に生きる私に大きな示唆を与えてくれた先生方に、まずもって感謝申し上げたいと思います。

大子地方の様相については、既に会報等で「開催地の横顔」として紹介されていたためもあって、景観等からかもしだす現在の大子地方の産業構造等に関心をもって参加されている先生方が多いのには驚きました。

言うまでもなく、戦前の大子地方は交通不便の地で、文化的な水準も低位にありました。米麦を基幹にお茶とこんにゃく、たばこ等

の工芸作物を主にした農業は、一部の地主や自作農家を除いては、生活も苦しく、農家の貧しさは社会通念になっていました。こうした貧しさからの解放は、戦後の農地改革と経済の高度成長にあることは、全国の農村と変わりはありません。農地改革によって、零細な自作農家は増えましたが、その後の経済成長にともなって、兼業農家への傾斜を強め、大子地方の農業は、今や主要な生活基盤ではなくなろうとしているのです。若手農業後継者の中には、大子町域の各地の適性を生かしながら、稲作を基幹作物として、こんにゃく、茶、りんご栽培や和牛の多頭飼育などに力を入れて新しい農業を推進している人たちもおります。しかし、大子地方のような苛烈な山間地の農業経営では、農業に生活を託するに足る自立経営農家は、全農家数の一割余に過ぎないのが現状です。

町当局も、国の政策に基づき、過疎対策と併行して農業構造改善事業として、農業生産の基盤整備を強化するとともに、農業の近代化をはかるために、施設導入の共同化などを押し進めてきました。受益者負担ということから、積極的には受け入れられず、補助金をもとに一部地域でどうにか推進されてきましたが、これも結果的には、離農なき兼業化が進んだに過ぎませんでした。また、過疎対策の一環として地域開発を進め、工場を誘致してその脱却に夢を托しましたが、離農してまでの賃金の保証はなく、兼業農家の増加をもたらしたに過ぎなかったのではないでしょうか。懇親会の席上で、ある先生も言われました。「現在の日本の農村は以前に比べ生活水準は高まった。しかし、農政や地域開発によって明るい展望を持つことはできないでいる。工業の進出にしても関連下請企業であり、それも農村の低賃金労働を求めての進出ではないか。大子にしたってそうでしょう。最低賃金の保障のない工業導入では、離農はできないですよ。兼業化を促進するだけではないですか。日本の農村は、農政によっても、地域開発によっても、自立経営農家は育たずに混迷を続けているのが現状です。」

こうした農村の持つ課題に、自ら県南地方の農村に入りこみ、ホワイトカラーを脱ぎ捨てて研究に取り組んでいる先生方にも出合い、農村に生きる一人として心を強くした次第です。今後の村研のご発展を期待し、番外参加記にかえさせていただきます。